

6.4 生物の生育・生息状況の変化の評価

「生物の生息・生育状況の変化の検証」における検証結果について、評価の視点を定めて場所ごとに評価を行い、今後の方針を整理した。

評価の視点は「新・生物多様性国家戦略」等を参考に、生物の生息・生育環境の視点から設定することとした。

視点の例として以下のものがあげられる。

- ・種の絶滅、地域個体群の消滅を回避する。
- ・その川（地域）がもともと有していた多様な環境の保全・復元を図る。
- ・連続した環境を確保する。
- ・その川（地域）らしい生物の生育・生息環境の保全・復元を図る。
- ・外来種対策による生物多様性を確保する。

平成4年のリオデジャネイロで開催された国連環境開発会議（地球サミット）で調印された「生物の多様性に関する条約」を受け、生物多様性の保全と持続可能な利用に関する基本方針と国のとるべき施策の方向を定めたものであり、平成7年に策定された。

(1)ダム湖内

ダム湖内の生物の生息・生育状況に関する評価を表 6.4-1 に示す。

表 6.4-1(1) 生物の生息・生育状況に関する評価 (ダム湖内)

検討項目		生物の状況	ダムとの関連の 検証結果	評価		今後の方針	
				視点	評価結果		
魚類	生息状況の変化	止水性魚類	ギンブナ、ギギ等の止水性魚類は平成5年度の調査から継続確認しており、個体数は増加傾向にある。	: 止水環境に適応した種が生息しているものと考えられる。	地域に特有な生態系を保全する。	止水域に特徴的な生物が継続して出現しており、現状で問題はほとんどないものと考えられる。	-
		回遊性魚類	ワカサギ、アユ、イワナ、ヤマメ、アマゴ、トウヨシノボリを確認している。アマゴは降湖型のサツキマス、イワナはダム湖内で大小の個体を確認しており、ダム湖で陸封されたものと考えられる。	: アマゴやイワナは、止水環境の存在によって陸封されているものと考えられる。アユの確認は放流によるものと考えられる。	地域に特有な生態系を保全する。	環境に適応し生息していることから、現状で問題はほとんどないものと考えられる。	-
		外来種	平成5年度および平成13年度にニジマスを確認した。放流による可能性が考えられる。	? : ニジマスのダム湖への侵入経緯は不明であるが、確認数が少なく、ダム湖に定着する可能性は低いと考えられる。	生物多様性を適切に保全する。	外来種による影響が懸念されるため、在来種の保全の視点から現状は好ましくない。	・分布域の拡大や在来種への影響に注意しながら、生息状況を継続的に調査して把握に努める。
底生動物	生息状況の変化	ダム湖湖心部の底生動物	ダム湖内ではイトミミズ目やハエ目(ユスリカ科)などの堀潜型の種類が優占しており、その種構成に変化はみられない。	: 止水環境に適応した種が生息しているものと考えられる。	地域に特有な生態系を保全する。	止水域に特徴的な生物が継続して出現しており、現状で問題はほとんどないものと考えられる。	-
		ダム湖湖岸部の底生動物	ダム湖湖岸部では、ミズカマキリやゲンゴロウ類などの止水性種を確認している。	: 止水環境に適応した種が生息しているものと考えられる。	地域に特有な生態系を保全する。	止水域に特徴的な生物が確認されており、現状で問題はほとんどないものと考えられる。	-

表 6.4-1(2) 生物の生息・生育状況に関する評価（ダム湖内）

検討項目		生物の状況	ダムとの関連の 検証結果	評価		今後の方針
植物プランクトン	生物相・生息状況の変化	植物プランクトン相	<p>： 止水環境の存在によって浮遊性の植物プランクトンが生息している。</p> <p>貧腐水性から中腐水性の水域に生息する種を多く確認した。</p> <p>ダム湖表層の水質に経年的な変化はなく、植物プランクトンの群集型及び水質階級別種数に大きな変化は認められなかった。</p>	地域に特有な生態系を保全する。	<p>大きな変化が認められないことから、現状で問題はないものと考えられる。</p> <p>クリプト藻類と緑藻類は汚濁や栄養型と関係する種が多いことから、今後の推移に注意が必要と考えられる。</p>	-
動物プランクトン	生物相・生息状況の変化	動物プランクトン相	<p>： 止水環境の存在によって浮遊性の植物プランクトンが生息している。</p> <p>貧腐水性から中腐水性の水域に生息する種を多く確認した。</p> <p>ダム湖表層の水質に経年的な変化はなく、動物プランクトンの群集型及び水質階級別種数に大きな変化は認められなかった。</p>	地域に特有な生態系を保全する。	<p>大きな変化が認められないことから、現状で問題はほとんどないものと考えられる。</p>	-
鳥類	生息状況の変化	水鳥	<p>： ダム湖面は、カモ類の越冬時の休息場所等で利用されている。</p>	地域に特有な生態系を保全する。	<p>人の近づかない水域と採餌場となる水際が維持されており、現状で問題はないものと考えられる。</p> <p>カワウは全国的に水産被害や林業被害が報告されていることから、今後の生息状況に注意が必要と考えられる。</p>	-
ダム湖内のまとめ		<p>(1)ダム湖内の特徴</p> <p>ダム湖内の止水環境に適応した魚類、底生動物等が生息し、ダム湖面ではマガモ、カルガモ、コガモ等の水鳥に利用されている。また、流入河川や支川の流入部では流水性の種も多く生息しており、ダム湖内で最も多様な生物相がみられる。なお、ダム湖内では要注意外来生物であるニジマスを確認している。</p> <p>(2)ダムによる影響</p> <p>ダム湖ができたことにより、ダム湖内に適応した生物が生息するようになった。重要種のオシドリや在来種のイワナなどが経年的に確認されるなど、良好な環境が維持されている。なお、淡水赤潮の発生が懸念される。</p> <p>(3)ダム以外による影響</p> <p>-</p>				

注)検証結果の凡例

- ： 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用によると考えられる場合
- ： 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用以外によると考えられる場合
- ： 生物の生息・生育状況の変化に対する影響要因が不明であった場合
- : 生物の生息・生育状況に、大きな変化がみられなかった場合
- ? : 生物の生息・生育状況の変化が不明であった場合

(2) 流入河川

流入河川の生物の生息・生育状況に関する評価を表 6.4-2 に示す。

表 6.4-2(1) 生物の生息・生育状況に関する評価（流入河川）

検討項目			生物の状況	ダムとの関連の 検証結果	評価		今後の方針
					視点	評価結果	
魚類	生息状況の変化	回遊性魚類	流入河川では、アユ、イワナ、ヤマメ、アマゴ(サツキマス)、トウヨシノボリの5種の回遊性魚類を確認した。	：イワナ、アマゴ(サツキマス)、トウヨシノボリは、ダム湖で陸封されたものと考えられる。アユの確認は放流によるものと考えられる。	地域に特有な生態系を保全する。	陸封化され、ダムでの生息は維持されていると考えられる。	-
		主要構成種	目別確認種数、生活型、摂食機能群、EPT 指数、優占種等の種構成には大きな変化は認められなかった。	-：流水性の底生動物を継続して確認している。	地域に特有な生態系を保全する。	大きな変化が認められないことから、現状で問題はほとんどないものと考えられる。	-
鳥類	生息状況の変化	渓流環境を利用する種	平成 14 年度調査で、カワガラスを確認した。	?：渓流性の種を確認したが、流入河川における調査は平成 14 年度に初めて実施したため、変化の検証はできなかった。	地域に特有な生態系を保全する。	単年度調査であり、現段階では評価できない。	継続した調査が必要である。
		河原環境を利用する種	平成 14 年度調査で、イカルチドリ、キセキレイ、セグロセキレイの3種を確認した。	?：河原環境を利用する種を確認したが、流入河川における調査は平成 14 年度に初めて実施したため、変化の検証はできなかった。	地域に特有な生態系を保全する。	単年度調査であり、現段階では評価できない。	継続した調査が必要である。
両生類	生息状況の変化	渓流環境を利用する種	平成 17 年度にヒダサンショウウオ、ナガレヒキガエル、カジカガエル、3種の両生類を確認した。	?：渓流性の種を確認したが、流入河川における調査は平成 17 年度に初めて実施したため、変化の検証はできなかった。	地域に特有な生態系を保全する。	単年度調査であり、現段階では評価できない。	継続した調査が必要である。

表 6.4-2(2) 生物の生息・生育状況に関する評価（流入河川）

検討項目			生物の状況	ダムとの関連の 検証結果	評価		今後の方針
					視点	評価結果	
陸上昆虫類	生息状況の変化	河原環境を利用する種	河川環境を利用する種として抽出した8種のうち、平成4～5年度に8種、平成11年度に3種確認したが、平成16年度には確認がなかった。	：平成16年度に河原環境を利用する種が確認されておらず、変化に対する影響要因が不明である。	地域に特有な生態系を保全する。	流入河川環境の保全の観点から好ましくない。	ダム湖の水位や河原付近での工事などに留意し、河原環境の把握に努める。
		外来種	平成4～5年度にニッポンモンキジガバチ、セイヨウミツバチ、オオタバコガを、平成11年度にセイヨウミツバチを、平成16年度にブタクサハムシ、オオタバコガを確認した。	：人の利用の増加や外来種の分布拡大などが影響したものと考えられる。	生物多様性を適切に保全する。	外来種による影響が懸念されるため、在来種保全の観点から現状は好ましくない。	・分布域の拡大や在来種への影響に留意しながら、生息状況を継続的に調査し、把握に努める。
流入河川のまとめ			<p>(1)流入河川の特徴 流入河川では、本川の真名川や笹生川で流れが緩やかな中・上流域を好むオイカワ、アブラハヤなどが、支川の持籠谷川や仙翁谷川ではイワナ、アマゴなどの渓流魚が多く確認されている。これらの流水性の魚類や回遊性魚のアマゴ（サツキマス）などを継続して確認している。底生動物も流水性の種が多く出現しており、EPT指数の高さから流入河川の生物相が豊かで、水質も良好であることが伺える。そのほか、渓流性の鳥類（カワガラス）や両生類（カジカガエル等）、河川環境を利用する鳥類（主に開けた河原で見られるイカルチドリ）などの生息も確認している。</p> <p>(2)ダムによる影響 イワナ、アマゴ（サツキマス）、トウヨシノボリは、ダム湖で陸封されたものと考えられる。</p> <p>(3)ダム以外による影響 外来種の昆虫類を確認している。</p>				

注)検証結果の凡例

- ：生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用によると考えられる場合
- ：生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用以外によると考えられる場合
- ：生物の生息・生育状況の変化に対する影響要因が不明であった場合
- ：生物の生息・生育状況に、大きな変化がみられなかった場合
- ?：生物の生息・生育状況の変化が不明であった場合

(3)下流河川

下流河川の生物の生息・生育状況に関する評価を表 6.4-3 に示す。

表 6.4-3(1) 生物の生息・生育状況に関する評価(下流河川)

検討項目		生物の状況	ダムとの関連の 検証結果	評価		今後の方針	
				視点	評価結果		
魚類	生息状況の変化	砂礫の環境を好む底生魚等の生息状況	産卵場として礫底を利用するアブラハヤ、ウグイ、ヤマメ等や、石下に産卵するカジカ、底生魚のアジメドジョウ、アカザ等を確認している。	- : アブラハヤ、ウグイ、ヤマメ、カジカ等を継続して確認しており、生息状況に大きな変化はみられない。	地域に特有な生態系を保全する。	大きな変化が認められないことから、現状で問題はほとんどないものと考えられる。	-
		外来種	平成 8 年度以降、ニジマスを確認した。	: 平成 5 年に漁協によって放流されたニジマスに起因している可能性がある。	生物多様性を適切に保全する。	外来種による影響が懸念されるため、在来種の保全の視点から現状は好ましくない。	分布域の拡大や在来種への影響に注意しながら、生息状況を継続的に調査して把握に努める。
		漁獲量	SS 濃度が水産用水基準を超過した平成 16 年、17 年に、アユの漁獲量が減少した。	: SS 濃度が水産用水基準を超過した平成 16 年、17 年に、アユの漁獲量が減少しており、濁水放流の影響があった可能性がある。	地域に特有な生態系を保全する。	下流河川環境の保全の観点から好ましくない。	継続した調査とともに、濁水長期化軽減対策を継続して実施する必要がある。
底生動物	生息状況の変化	主要構成種	下流河川の EPT 指数は流入河川より低く、トビケラ目や堀潜型、堆積物収集者等が比較的多かった。	: ダムから流下した有機物を栄養源に、造網型トビケラ類や堀潜型、堆積物収集者等が増加し、底生動物相が変化した可能性がある。	地域に特有な生態系を保全する。	下流河川環境の保全の観点から好ましくない。	継続した調査が必要である。
両生類	生息状況の変化	溪流環境を利用する種	平成 17 年度にカジカガエルを確認した。	? : 溪流環境を利用する種を確認したが、下流河川における調査は平成 17 年度に初めて実施したため、変化の検証はできなかった。	地域に特有な生態系を保全する。	単年度調査であり、現段階では評価できない。	継続した調査が必要である。
陸上昆虫類	生息状況の変化	河原環境を利用する種	河原環境を利用する種として、ミヤカマワトンボ、カワラスズ、ヤチスズ、エゾスズ、カワラバッタ、ハネナガヒシバッタ、コパネヒシバッタ、アイヌハンミョウの計 8 種を確認した。	? : 河原環境を利用する種を確認したが、下流河川における調査は平成 16 年度に初めて実施したため、変化の検証はできなかった。	地域に特有な生態系を保全する。	単年度調査であり、確認数も少ないため現段階では評価できない。	継続した調査が必要である。

表 6.4-3(2) 生物の生息・生育状況に関する評価（下流河川）

<p>下流河川の まとめ</p>	<p>(1)下流河川の特徴 下流河川では、アブラハヤ、ウグイ、ヤマメなど礫等の存在する環境を利用する魚類や、カジカ、トウヨシノボリなどの底生魚を継続して確認している。また、草地や森林が隣接する渓流環境に生息するカジカガエルや、河原環境を利用するカワラバタ、アイヌハンミョウ等の昆虫類も確認した。 なお、「平成 17 年度河川水辺の国勢調査全体計画の策定（真名川ダム・九頭竜ダム）報告書」によると、魚類調査の既往調査地点はダムサイトから離れた場所にあったため、調査地点を上流部に移動し、新規設定する計画となっている。</p> <p>(2)ダムによる影響 魚類について、SS 濃度が水産用水基準を超過した平成 16 年、17 年に、アユの漁獲量が減少しており、濁水放流の影響があった可能性がある。 また、底生動物について、下流河川の EPT 指数は流入河川より低く、トビケラ目や堀潜型、堆積物収集者等が比較的多かった。ダムから流下した有機物を栄養源に、造網型トビケラ類や堀潜型、堆積物収集者等が増加し、底生動物相が変化した可能性がある。</p> <p>(3)ダム以外による影響 外来種のニジマスの確認は、漁協による放流に起因している可能性がある。</p>
----------------------	---

注)検証結果の凡例

- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用以外によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化に対する影響要因が不明であった場合
- : 生物の生息・生育状況に、大きな変化がみられなかった場合
- ? : 生物の生息・生育状況の変化が不明であった場合

(4)ダム湖周辺

ダム湖周辺の生物の生息・生育状況に関する評価を表 6.4-4 に示す。

表 6.4-4(1) 生物の生息・生育状況に関する評価 (ダム湖周辺)

検討項目		生物の状況	ダムとの関連の 検証結果	評価		今後の方針
				視点	評価結果	
植物	生育状況の変化	ダム湖周辺の植生は、主にクリ - コナラ群落、ヤナギ低木群落、ツルヨシ群落、ススキ群落等で、これらの面積比率は、3回の調査でほとんど変化は認められなかった。なお、ダム湖周辺のミズナラに立枯れが散見され、カシノナガキクイムシの被害がおよんでいる可能性がある。	- : ダム湖周辺の群落やその群落面積比率にほとんど変化がみられないことから、植生に大きな変化はみられないと考えられる。	生物多様性を適切に保全する。	大きな変化が認められないことから、現状で問題はないものと考えられるが、ミズナラの立枯れには注意が必要である。	緑化などの工事の際には、改訂された「湖岸緑化マニュアル(案)」をもとに在来種を用いた緑化を行う方向になっており、外来種の分布の拡大や新たな種の侵入防止に努める。 ミズナラの立ち枯れをモニタリングする。
	原石山跡地の植生の変化	斜面上部は人工草地、斜面中部にはススキ群落、カワラハハコ群落がみられ、平成7、8年度に変化は認められなかった。平成15年度には人工草地がススキ群落に置き換わった。	- : 斜面上部の人工草地がススキ群落に置き換わったほかに大きな変化はみられなかった。	地域に特有な生態系を保全する。	大きな変化が認められないことから、現状で問題はほとんどないものと考えられる。	
	外来種	平成7年度には59種(比率7.0%)、平成10年度には64種(比率7.2%)、平成15年度には56種(比率6.6%)の外来種を確認した。一般に法面緑化に利用される種であるイタチハギが昭和53年度には確認されず、平成7~15年度に確認した。	: ほぼ同数の外来種を毎回確認している。平成7年度から実施した「真名川ダム湖岸裸地対策調査」における緑化試験で使用したイタチハギが、移出して分布を広げている可能性が考えられる。	生物多様性を適切に保全する。	外来種による影響が懸念されるため、在来種保全の視点から現状は好ましくない。	

表 6.4-4(2) 生物の生息・生育状況に関する評価（ダム湖周辺）

検討項目		生物の状況	ダムとの関連の 検証結果	評価		今後の方針	
				視点	評価結果		
鳥類	生息状況の変化	樹林性種	ツツドリ、コゲラ、サンショウクイ、クロツグミ、シジュウカラ等、多くの樹林性鳥類を確認した。	- : 多くの樹林性種を継続して確認している。	地域に特有な生態系を保全する。	大きな変化が認められないことから、現状で問題はほとんどないものと考えられる。	-
		集団分布地	イワツバメの集団営巣を継続して確認している。	: 橋桁等の人工構造物が継続して営巣場所として利用されている。	地域に特有な生態系を保全する。	大きな変化が認められないことから、現状で問題はほとんどないものと考えられる。	イワツバメの営巣地を保護し、橋脚の管理に注意する。
		猛禽類	ダム湖周辺では、オジロワシ、オオタカ等の 8 種類の猛禽が確認され、ハヤブサについては繁殖を確認している。	: ダム湖周辺は、猛禽類が確認されるなど、豊かな森林環境が広がっている。ハヤブサが人工構造物に営巣している。	地域に特有な生態系を保全する。	環境に適応し生息していることから、現状で問題はほとんどないものと考えられる。	ハヤブサの営巣地を保護し、繁殖状況をモニタリングする。

表 6.4-4(3) 生物の生息・生育状況に関する評価（ダム湖周辺）

検討項目		生物の状況	ダムとの関連の 検証結果	評価		今後の方針	
両生類・爬虫類・哺乳類	生息状況の変化	樹林性種	ネズミ類などの小型哺乳類からツキノワグマ等の大型哺乳類を含む10種を確認した。	- : 樹林を生息場所とし木本や草本の葉を餌とするカモシカと、樹上空間を多く利用するテンを継続して確認している。	地域に特有な生態系を保全する。	大きな変化が認められないことから、現状で問題はほとんどないものと考えられる。	-
		ロードキル	道路上で平成6年度に1種（1個体）、平成12年度に5種（23個体）、平成17年度に11種（16個体）の動物の死体を確認した。	: ダム湖周辺道路では、主に両生類・爬虫類のロードキルを確認しており、その確認種数は増加している。	地域に特有な生態系を保全する。	確認箇所が少なく、動物の移動経路が保護されているかどうか評価できない	巡視の際に、場所や種に注意して情報を収集し、発生状況を把握する。
		両生類の繁殖状況	イモリ、カジカガエル、ヒダサンショウウオ等6種の両生類の繁殖（卵塊、卵のうち、幼生）を確認した。	- : 沢などで繁殖するヒダサンショウウオをはじめ、3種の両生類について、平成12年以降経年的に繁殖を確認している。	地域に特有な生態系を保全する。	大きな変化が認められないことから、現状で問題はほとんどないものと考えられる。	-
		外来種	ハクビシン、ハツカネズミを確認し、ハクビシンは継続して確認した。	: ハクビシンは平成6年度の調査より継続して確認している。	生物多様性を適切に保全する。	外来種による影響が懸念されるため、在来種保全の視点から現状は好ましくない。	分布域の拡大や在来種への影響に留意しながら、生息状況を継続的に調査し、把握に努める。

表 6.4-4(4) 生物の生息・生育状況に関する評価（ダム湖周辺）

検討項目			生物の状況	ダムとの関連の 検証結果	評価		今後の方針
陸上昆虫類	生息状況の変化	チョウ類相	いずれの調査年度も多自然種と準自然種で多くを占めていた。平成 4～5 年度と平成 16 年度の EI 値は 74 と 86 であり、ダム湖周辺は中自然環境と判断された。また、平成 11 年度の EI 値は 102 であり、多自然と判断された。	- : ダム湖周辺のチョウ類の生息環境に、大きな変化は認められない。	地域に特有な生態系を保全する。	チョウ類の生息環境に大きな変化は認められないことから、現状で問題はほとんどないものと考えられる。	-
		止水性水生昆虫	平成 4～5 年度には 5 種、平成 11 年度には 18 種、平成 16 年度には 4 種の止水性水生昆虫を確認した。	: ダム湖周辺で、止水性昆虫類を継続して確認しており、ダム湖内でミズカマキリやゲンゴロウ類の生息を確認した。	地域に特有な生態系を保全する。	継続的に止水性昆虫を確認していることから、現状で大きな問題はないと考えられる。	-
ダム湖周辺のまとめ			<p>(1)ダム湖周辺の特徴 ダム湖周辺には、クリ - コナラ群落をはじめとする代償植生の木本群落が広く分布しており、木本および草本植生の分布面積に大きな変化は認められない。植物の外来種は毎回同様に確認されている。また、在来種の両生類の繁殖や樹林性の鳥類、哺乳類、昆虫類等についても大きな変化は認められない。猛禽類については、人工構造物でのハヤブサの繁殖を確認した。なお、ダム湖周辺道路では、主に両生類・爬虫類のロードキルを確認しており、その確認種数は増加している。</p> <p>(2)ダムによる影響 人工構造物を利用してイワツバメとハヤブサが繁殖している。</p> <p>(3)ダム以外による影響 外来種のイタチハギは、平成 7 年度から実施されている「真名川ダム湖岸裸地対策調査」における緑化試験で使用したイタチハギが、移出して分布を広げている可能性が考えられる。平成 15 年度にはイタチハギ群落がダム湖岸沿いに確認された。</p>				

注)検証結果の凡例

- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用以外によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化に対する影響要因が不明であった場合
- : 生物の生息・生育状況に、大きな変化がみられなかった場合
- ? : 生物の生息・生育状況の変化が不明であった場合

(5)連続性

連続性の観点からみた生物の生息・生育状況に関する評価を表 6.4-5 に示す。

表 6.4-5 生物の生息・生育状況に関する評価（連続性）

検討項目	生物の状況	ダムとの関連の 検証結果	評価		今後の方針
			視点	評価結果	
回遊性魚類 の陸封化	ダム湖内ではワカサギ、アユ、イワナ、ヤマメ、アマゴ（サツキマス）、トウヨシノボリの 6 種を、流入河川ではアユ、イワナ、ヤマメ、アマゴ（サツキマス）、トウヨシノボリの 5 種を回遊魚として確認した。	調査結果より、イワナ、アマゴ（サツキマス）、トウヨシノボリの 3 種が陸封されていると考えられる。ダム湖の環境に適応し、陸封化したと考えられる。	地域に特有な生態系を保全する。	陸封化され、ダムでの生息は維持されている。	-
回遊性魚類 等の遡上阻 害	回遊魚は、ワカサギ、アユ、イワナ、ヤマメ、アマゴ（サツキマス）、トウヨシノボリの 6 種を確認した。	真名川ダムには魚道が設置されていないことから、回遊性魚類等の遡上は阻害されていると考えられる。	地域に特有な生態系を保全する。	陸封化や放流によって個体群は維持しているが、生活史は分断されている。	回遊魚の生息状況をモニタリングする。
連続性のま とめ	(1)ダムの影響 ダム湖の存在により、回遊性魚類が陸封されている。また、回遊性魚類等の遡上がダムの存在によって阻害されている。				

(6)重要種

重要種の生息・生育状況に関する評価を表 6.4-6 に示す。

表 6.4-6 生物の生息・生育状況に関する評価（重要種）

検討項目	生物の状況	ダムとの関連の 検証結果	評価		今後の方針
			視点	評価結果	
生息状況の 変化が不明 であった重 要種	過去の調査で生息を確認したが、最新の調査で確認していない。	? : 生息密度の低さや過去に詳細な記録がないことなどで再確認が難しいため、生息状況の変化が不明である。	地域個体群を維持する。	生息状況の変化が不明であるため、評価できない。	今後も引き続き調査を行い、生息状況を把握していく。
ハヤブサ	「真名川におけるハヤブサの営巣について」(真名川ダム管理支所資料)によると、平成 13 年から 4 年連続で繁殖成功が確認している。	: ダム湖周辺は、高次消費者である猛禽類の生息範囲の一部になっている。	地域に特有な生態系を保全する。	環境に適応し生息していることから現状で問題はないものと考えられる。	ハヤブサの生息環境の保全が望まれる。
重要種のま とめ	(1)ダムの影響 ダムの存在による重要種への影響について、特に明確なものはみられず、影響要因は不明である。 (2)ダム以外の影響 ダム以外の影響については不明であるが、周辺環境の変化、外来種の侵入の影響等も考えられる。				

注)検証結果の凡例

- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化がダムの存在・供用以外によると考えられる場合
- : 生物の生息・生育状況の変化に対する影響要因が不明であった場合
- : 生物の生息・生育状況に、大きな変化がみられなかった場合
- ? : 生物の生息・生育状況の変化が不明であった場合